

回想「てら子屋2002・夏の巻」

森で学んだ あることのないこと

守小屋TALK

小森谷 浩之さん
大西 琢也さん
聞き手・中間 真一

小学校2年生から6年生までの男女30名、電気も電話もガスも水道もない山奥の小屋に泊まり、5年目の夏のてら子屋は開かれた。樹齢千年のカツラを直指して崖を登り、胸までつかる沢を登り、子どもたちは森を遊んだ。子どもたちはこの山を開いてくれた主、この森で子どもたちを導いた主、この二人に、学びの場としての森を語ってもらった。

山里育ちだから得られるもの

中間 今年の夏の「てら子屋」は、小森谷さんの森で、大西さんのリーダーにより、キャンフ型での5日間の「てら子屋」となりました。あれから3カ月あまり経ちましたが、緑色の生命力に満ちていた森が、黄色や紅、褐色と、それぞれの個性の彩りをもって秋の森に変わりましたね。当たり前なのでしょうが、季節感に乏しい都会勤めの毎日からやってきた私には、時間が経ったということを感じさせられます。参加した子ども感想文の中に、帰宅翌日の空気が書いてあったのを思い出します。二人とも都心ではなく、多摩ニュータウンに住んでいる子どもです。翌朝起きたとき、空気がまぶしかったです。当日、母親はさすがに朝だと思っただけで起きたのに。

小森谷 そうでしたか。私は日本の100年後のことを考えたら、今の状況に子どもを置いておくのは非常にまずいと思っと思っています。小学校3年生か4年生くらい、永久歯に生え変わるまで、こつこつ山村、農村などで育つということが重要だと考えています。少し抽象的な概念を学びはじめたら、都会に戻ればいい。

私は、今の日本が戦後これだけ急激に発展できたのは、その牽引役を担った今



代とはタフネスの違いを感じます。

小森谷 そうです。身体と心を含めて、つらさに耐えられないんです。

中間 「つらさ」といえば、このあたりは、先週末にもう雪が降ったんですね。今日もとても寒いのですが、「暖かい」と「寒い」、「気持ちいい」と「気持ち悪い」、このような差を実際に身体と心で共に感じるのが、都市化社会ではなくなってしまうと思います。これは、小森谷さんが、疎開の話で言っていることに通じます。

ところで、疎開同様の環境に生まれ育って、現在に至っている小森谷さんの子ども時代の話の聞かせてください。

小森谷 私は1966年生まれです。今の子どもたちとは違って、親に何か買ってもらいたいとねだっても、買ってくれなかつたです。たとえば、子どもの頃スポーツタオルというのが流行りました。うちの親は、「浩之、そんなのは手ぬぐいでいいんだ」で終わりです。この辺の森で遊んでいると、親父に突然ら致されて、仕事に連れていかれたりしていました。友だちと遊んでいる最中でも、おかまいなしでした。

中間 それでは、身近にお父さんの仕事を見ながら少年時代を過ごしてきたわけですか。

小森谷 見ているだけでなく、かなりいっしょに山を歩きました。その頃は、とても嫌なことでした。そして、小学校4年生頃に初めて一人で山に入ってテントを張って寝たのです。

中間へえ、一人で。なぜ、一人で山に入るうと思ったのですか。

小森谷 とにかく、一人で山に入り、泊まりたいと思ったのです。今でも鮮烈に覚えているのは、山の中の恐怖心。自分の恐怖心との戦いでした。夜中の何時までかは我慢していたのですが、ついうとうとして朝になった。無事だった自分に気づいて安心したわけです。今思い返すと、ああいう思いをするというのは、大切だったなと感じます。

森が活ければ、人が生きる

中間 山での仕事を継ぐことは、いつ頃決心したのですか。

小森谷 長男としての立場を自覚していました。小学5年生ぐらいの頃には、すでに自覚があったと思います。しかし、中学時代に出会った先生が型破りな先生でした。その先生のおかげで、家を継がない生き方についても考えはじめることができました。これは、大学まで私の大きなテーマになっていきました。



中間 そして結局、山の仕事の道に向かったのは、何かきっかけがあったので
すか。

小森谷 若い頃は、アフリカに移住することを考えていました。学生時代に1カ月間ヒッチハイクでアフリカを旅して、この地で生きたいと思ったのです。しかし、大学3年のときに父親が倒れました。そのとき、やはり長男として最低限の責務は果たすべきだと思い、家に帰ることを決めました。当時すでに、日本の林業に将来はないと言われていました。しかし、家業は林業です。そこで、1年間大学を休学して、全国の先進林業の地を訪ね、志の高い林業家の方々の話を聞いてまわりました。そして、やる気になれば何とかなるんじゃないかと感じるこ
とができたのです。

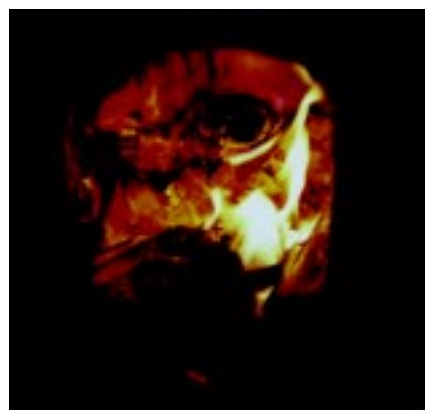
しかし、やる気になって、家に帰ってきた私を迎えた親父の言葉は、「浩之、もう家がだめなんだ」の一言でした。その後、とにかくできることをやって、長男としての責任を果たすべく、土木工事の監督などをやってきました。ある日、私は工事中に事故故に遭いました。そこでつくづく、人間はいつ死ぬかわからない。明日死ぬかもしれない。だから、自分がやるべきと信じたことをやることに決
心しました。こうして、都会の子どもた



ち、障害を持つ子どもたち、さまざまな人々が共に生きる場として、森を活かそうと決め、「森の遊学舎」というNPO法人の設立にもつながっていったというわけです。

林業は、戦後社会で国民が自分の家を持つという夢をかなえる、人々が豊かになるのに貢献できる仕事でした。しかし、人口が減り、世界的な経済規模の中、もはや日本の林業は、家を建てるための資源を生む仕事として適合しきれなくなっているのは事実です。それでは、森や山はもう不要なのか。この森を使って何かできないか。そして、これからの人間に必要なことを考えたとき、子どもの教育のための資源として森を活かそうという考えに至ったのです。

中間 一方、大西さんは基本的に山育ち



というわけではありませんね。しかし、森や川、海と、人間にかかわって生きるという生き方を選択し、野外教育の実践者として旗揚げして、この山での活動に参画している。なぜ、そういった活動を始めたのでしょうか。

大西 5年前、僕は縄文時代の丸木舟を復元しようとして決めて、地元神奈川県内木を探しはじめました。なかなか適当な木は見つからず、最終的に小森谷さんの弟さんを紹介されました。そして、素晴らしいツガの大木を探し当てることができたのです。それがきっかけです。

中間 大西さんは、火起こし世界一記録保持者や、TVチャンピオン初代「野人王」という肩書きを持ちつつ、考古学の世界の人でしたね。そして、野外教育の指導者として実践を重ねている。そ



う大西さんは、子どもたちにとっての森とは何だと考えますか。

大西 森だとか海だとか、もつと広げて言つと、自然というのは何かということかもしれない。一人旅をしたり、一人で山に登ったりしたとき、その場にいることで自分が生きているなと感じることがあります。高い山に登って、酸素がなくて、ふらふらになっているときにも感じます。そうではなく、低い峠でも、気持ちのいい場所で思わず昼寝をしちゃうとか。それも、まさに自分が生きている実感です。温泉に入ったら気持ちよかつたとか、知らないところに行つて、ちよつと泊まつていけよとか、ご飯食べていけよと声をかけられたりすることが、自分が生きている実感につながるのです。

一人旅をすると、すべてを自分でやりきらなければならぬ。でも、それが気持ちいいし、楽しい。自然の中に入れば入るほど、それがすごく強く感じられる。やりがいというか、充実感というか。それが実感できる場所が僕にとって海であり、山であり、自然なのです。そして、そういう実感を一人でも多くの人に、できるだけ子ども達の頃に感じてほしいと思います。

中間 私も、気持ちいいと感じられるこ



とが、とても大事だと思っています。しかし、家の中でテレビを見たり、ゲームなどをしているのが気持ちいいと思つている子どもたちも、たくさんいるという現実があります。今夏、この守小屋で過ごした連中も同様です。「また、ゲームの生活に戻りました」という素直なお母さんの手紙は現実なのです。だけど、彼らのここでの5日間は、明らかに「気持ちいい」ことが、いつもと違つていた。

大西 それこそ、まさに僕が言つてい「生きている実感」です。彼らが持つているものを、すべて出さなきゃいけない状態になつていたわけですから。全部出されるかどうかは、わからないけれど、たとえば暗い中でモノを見ようとすると、今まではよく見なくても見えていたかもしれない。

たとえば、自動販売機の明かりは、すごく明るい。スイッチを入れれば、簡単に電気がつく。自分の能力を使わなくても、身のまわりのことは、ほとんどできちゃう。だけども、ここに来ると自分の能力を使わないと、どつしよつともなくなる。夜は真っ暗闇になつてしまふ。夏でも夜は寒いほど冷える。逆から言えば、自分の持つているものをちゃんと出さないと、生きていけない。そういうのが、ここでの生活じゃなかったでしょうか。



「ある」ことだけで、豊かになれる？」

中間 そうですね。ここでは、お腹がすいているから何でもおいしく食べられたり、ぼつとん便所で用を足すことができたりしたこと、同じことですね。

小森谷 本当は、そういうことは、それぞれの家にもできることもかもしれない。たとえば、子どもに小さなときから料理をいっしょにさせるとか。うちの子は4歳ですけど、料理の手伝いをさせています。しかし、都会でそういうことをさせることって、現実問題としてできないですよ。

大きな理由の一つは、親に暇がないということ。親からすれば、そうするためには、すごい忍耐力と時間が必要となります。子どもに対して、我慢しなければならぬし、言いたいこともいっぱいあるし。これは、都会の時間のない親にはできない。とにかく、「早くしなさい」が一番だから。子どもを、もはや子どもとして扱わなくなりつつある。

中間 子どもを静かにさせるために、テレビとかビデオを使うのも同じ。

小森谷 ビデオを見せておけば、子どもは静かになって、親は自分の時間を使える。それが今の親なんです。親が悪いというよりも、そういう親をつくり出し



ている社会が悪いんでしょっけんど...。とにかく、すごく時間に追いつめられている。

中間 今、「ある」ことが当たり前になっているんだけど、それが一つでも欠けたら、という実体験を持つということはこの森に来ることの大きな意味の一つですね。

「てら子屋」の2日目の夜、ナイトハイクをしたでしょ。結構明るくて、時間も遅くなってしまい、スーツと済ませてしまったかと反省していたのだけれど、子どもたちの感想文には、ナイトハイクのシーンがかなり出てきている。すごく印象に残ったようなんです。「熊の足が見えた」、「鹿の鳴き声が聞こえた」、「奥の方で目が光った」とか。多くの子どもたちが、闇の中で感じたことを書いているのは、一つの驚きでした。何かがなくなることは、これほどまでに、子どもたちのセンサーの感度を高めることにつながるんだ。

そういう意味で、ここでの経験はもはや現実の日常では無理がある。だからこそもっと当たり前のように、子どもたちがこついつところに来る機会を持てるようにするということを本気でやらねばならない、大きな価値があると思います。大西 僕は、夜のプログラムを大事にし





ているんです。夜つて、もう都会にはないですから。暗くはなるけど、明るい。奥多摩の山に登っても、ものすごく明るいんですよ。というのは、明るいところにだけいれば暗いということが何だかわからなくなる。気持ちのいいところだけにいたら、それが本当に気持ちがいいのかどうかわからなくなる。

あるキャンプで、水がなくて自分たちで1時間ぐらいかけて運ばなくてはならなかった。そのキャンプが終わった後、ホテルに行くと大浴場があって、お湯が

ジャージャー流れていた。そのとき、子どもたちが言ったことは「ああ、水がもつたいない」。あふれる水を止めようとする勢いでした。そういうことを感じてくれたらいいなと思うんです。理屈じゃなくて。

マニユアルで森は味わい尽くせない

中間 さて、それでは都会の日常ではもはや得られない、場とプログラムをどうしようかという問題になります。「都市と山村の交流事業」などと、かけ声かければよいという問題でもないような気がします。

小森谷 素晴らしい森があるからと、マナーを知らない都会の人たちが押し付けて来ることに對して、やはり手放して林業家が歓迎するわけにはいきません。山に入つて、火をつけられたらどうするか。ゴミだけを残して帰っていくとか。森を訪ねる側が、「金を払つてるんだから、当たり前だろ」というような態度では、この話は成立しない。やはり、互いの信頼関係が必要です。しかし、私は教育を目的とした活動であれば、それほど問題は大きくないと思っています。最初はサービスを売つという感覚で来たとしても、森の力、森の広さは、サービスな

なんていう枠に収まりきれないですから。本当の森を感じる事ができれば、危険は解消されると思う。

中間 そつなると、本当の森を味わい感じられるプログラムや、指導者の質の問題になります。ところで、今回の夏のてら子屋では、参加した子ども30名中29名が感想文を送ってきてくれました。それほど、インパクトが大きかったのでしょうか。こういうプログラムは、誰でもどこでも可能でしょうか。

小森谷 今回の「てら子屋」では、いろいろあつたみたいじゃないですか。こんなことをさせたら危ないんじゃないかと、かまずいんじゃないかと。だけど、子どもはちゃんと生きていけるわけ。子どもこそ生きていける。適応能力があるんです。だから、われわれがしなければならぬことは、命を落とすことのないくらいの最小限のこと。都会では、かすり傷もできないから、ちょっとけがをすると、本人も親もびっくりしてしまつ。そのあたり、親との関係が難しい。大西 それから、今の指導者の多くはマニユアルで育ってきた世代です。野外教育も環境教育もマニユアル漬けです。金太郎飴化しています。どこに行つても、誰がやっても同じプログラム。逆にそれを売り文句にしているところすらある。



てら子屋2002 in あずまむら

テーマ 木と生きもの、木も生きもの

日程 2002年7月30日(火)～8月3日(土)、4泊5日

場所 群馬県勢多郡東村、村営黒坂石バンガロー村および小嶽守小屋

キャンプ指導 大西琢也(特定非営利活動法人「森の遊学舎」)

自然観察指導 盛口満(珊瑚舎スコレ・元自由の森学園理科教諭)

キャンプスタッフ 風の谷幼稚園教諭 森の遊学舎スタッフ、

ヒューマンルネッサンス研究所スタッフ

参加小学生 30名(小学校2年生～6年生、男女)

協力 東村教育委員会、黒坂石炭焼きの会、有限会社共進林建、

地元有志の皆様

スケジュール

第1日目(7月30日)

バスがやつと通れる山道を登って黒坂石バンガロー村到着

川あそび、夕飯づくり

第2日目(7月31日)

早起き虫とり隊、山奥の千年の木を目指して山登り、

げっちょ先生の理科教室1時間目、山の炭焼き教室、真っ暗闇のハイキング

第3日目(8月1日)

豪華(?)バスで山奥の「もりこや」に出発

げっちょ先生の理科教室2時間目、激流すぶぬれ沢登り

第4日目(8月2日)

山のお仕事お手伝い、これで最後だ川で飛びこみ、雨の中のキャンプファイヤー

第5日目(8月3日)

作品づくり(焼き板とコースター作り)、みんなの5日間振り返り、どしゃぶりの中
屋根なしバスで山のふもとへ、ホッとしたのかバスに乗ったとたんにくっすり



僕は、それは違うと思うのです。その指導者の持ち味によって、面白いプログラムが成り立つのであって、人や場が違えば違う。自分で一人旅をしてきたとか、自分で何かを積み上げてきた人、たとえば全然違う職業をしてきた人が野外教育をする。そうでないと野外教育の醍醐味が伝えきれないと思っています。アウトドアの技術を持っていることは、もはや当たり前です。通訳になりたい人は、英語が話せて当たり前で、プラスアルファが必要なのと同じ。

また、プログラムは、今は大人が作っています。でも、子どもがほんとうに面白いものは、もしかすると違つかもしれない。最終的な理想像としては、子どもが自分でプログラムを作っていけるようになる、いいと思っています。

小森谷 私は、キャンプファイヤーでプログラムの質の問題を感じます。派手で大きな炎の周囲で騒ぐだけでなく、小さな炎を囲んで、大人も子どもも自分の内側に静かに向かっていく。自然の中に入って確かに楽しいんだけど、楽しいだけでなく、自然との、自分との対話に持って行ってあげたい。それぞれの子どもが、ポツンと離れて座って30分間何もしないと。子どもが自然と出会えるような、自分と出会えるような、そういう

こともプログラムの質だと思っています。中間、どうもありがとございませした。だいぶ冷えてきました。暖かい薪ストーブから離れたくないのですが、暗闇となる前に山を下りましょう。ないことを知って、あることを感謝する、これからの豊かさへの道ですね。今後のお二人の活躍を期待します。



おおにし たくや

1975年和歌山県生まれ。野外教育指導者。縄文丸木舟復元プロジェクト代表。野外活動は、5歳から続くふもとからの富士山登山や北米大陸最高峰登頂など、国内外で経験豊富。火起こしから家造りまで、世界各地に伝わる「古の知恵」を活用した、野外教育を実践中。



こもりや ひろゆき

1966年生まれ。北海道大学農学部農業工学科在学中の5年間、仲間とともに実家の山で草刈り十字軍の活動を進める。91年卒業後、(有)共進林建に入社し、父とともに家業を切り盛りする。99年より家の山の森を活かした自然体験活動に着手。この活動を中心として、2002年にNPO法人「森の遊学舎」を設立して代表に就任。

(子どもの感想)

あずま村は車のはしる音なんかしなくて、

しーんとしていました。(小2、男子)

山を下る時、くまのひっかいたあとが木

にのこっていました。(小3、女子)

さいしょトンボがさわれなかつたけど、

かまえていたら、いつのまにかさわられて

いました。お家にかえってトンボを見つけて

ゆびをだしても、とまってくれませんでした。

がっかりしました。(小2、女子)

千年の木には日が当たっていた。千年の木

は森の王様なのかな。(小5、男子)

川の水が飲めるなんてびっくりした。

(小5、男子)

トンボ火花たのしかったです。(小2、男子)

二つの川の水をのみくらべてみたら、一つ

の方はしょっぱくて、もう一つの方は石の

においがした。(小3、男子)

わたしがきれいな石をみつけて、げっちよ

先生にきいてみたら、これは、すいしょう

がたくんはいっていて、めずらしい石だ

よと言ってくれて、うれしかったです。

(小2、女子)

げっちよ先生が、なにかの死体を持って帰っ

て、にたり、ポリデントを使ってホネにする

と聞いてびっくりしました。(小4、男子)

そこでは、つかれもぶっ飛びぐらいのきれ

いな滝を見ることができました。(小4、男子)

でも、てらこやは楽しかった。けどもうほっ

とんべんじよはいやだ。(小2、女子)

ぼくは、げっちよ先生はよくこんなにほね

をあつめられたなとびっくりした。ほねを、

なべでぐつぐつにくくと、きれいになるとお

しえてくれた。ぼくもやってみよう。

(小2、男子)

ぼくはじょうぶな木をたった八人であおせ

てびっくりしました。(小5、男子)

げっちよ先生の理科教室の中で、一番おど

るいたのは、りすはクルミを歯できれいに

を食るといふことでした。(小4、女子)

山登りはとてもきつくて大変だったけど、

登った後の達成感がすくありました。が

んばれば、いいことがあるって教えてくれ

たようでした。(小6、女子)

ポットベンじよは、うんちよりくさかった。

だから、できるだけいかにないようにした。

(小2、男子)

ナイトハイク、いろんな音が聞こえたりし

て、「出てこないかな」と少しワクワクして

いました。(小5、女子)

(親の感想)

てら子屋は、子どもにとって「何をするか

ら行く」というものでない。行けばびっく

りするから行くところのようだ。

またもとの日常へと戻った娘を見ながら、

親としては彼女の心の中に小さなダイヤを

埋め込んでもらったような気分だ。

もしもその場に親がいたら、きつと「危な

いから」を言ってしまうだろう。

高いところから川に飛び込んだことは、か

なり自信になったようで、その後のやるこ

とが変わってしまったほど。

中でも骨の話はたいへん興味深かったよう

です。今まで、きれいな整備されたところ

にしか連れて行ったことがなかったの得心

配していたのですが、まったく無用だった

ようです。



夏のてら子屋5日間を振り返った。
山登りはつらかった。沢の水は冷たかった。
夜の森は真つ暗だった。

だけど、

千年の木は大きかった。

イワナのいる沢の水はあまかった。

闇の向こうには獣の気配があった。

ないからこそ、

あることの豊かさも感じられた。(中)